「開拓１２０周年」

新得町役場屈足支所長　中村　吉克

今年は新得町に開拓の鍬をおろされてから１２０年。いろいろな記念行事が企画されていますが、８月24日行われた「プロローグ開拓の道程を体験しよう」に参加しました。南富良野町の串内牧場からパンケシントク駅逓所跡地までの４・５kmをハンターに先導されて北電の作業路を歩きました。一八九九年（明治32年）には深雪をラッセルで藁の長靴を履いて子供を含めて約１００人の方が山を越えて開拓が始まりました。開拓地は昼でも暗く生い茂るナラなどの大木や身の丈以上のイバラなどの下草で覆われ、大自然にしばし呆然としたと言われています。大木を倒して開墾することは、想像を絶する苦労であったと思われます。

それから１２０年がたち、鉄道や道路ができ、電化が進み畑や牛や人も増えて町が形成されて今日に至っています。

１２０年の間にゼロから今の新得になったことを考えれば、時代の流れもありますがすごいことだなと思います。

改めて今あるのは先人たちに苦労の上にあるのだと感謝です。

ところで、朝のテレビ小説の「なつぞら」も終わりですが、泰樹さん役の草刈正雄さんの演技には涙しますね。

開拓で苦労しても朝日を見る度に「また頑張ろう」と開拓者魂で切り開いたと放送されましたが、開拓者の苦労に比べれば少子化、過疎化など今の困難なことも小さなことと感じます。

先人から引きついた開拓者魂があれば、何でも乗り切れるはず。新しい時代を明るく開拓していきたいものですね。

10月以降も北海道新聞・道新スポーツの購読料は変わりません。

電子版で朝刊読めます

スマホで！タブレットで！パソコンで！紙面を丸ごと読むことができるサービス、「どうしん電子版」！
購読料プラス　0円

「どうしん電子版」は、道新を月決め料金で定期購読している方なら、無料で登録できる電子版会員限定のサービスです。

お問い合わせは
0120-889-104

こちら屈足駐在所

No６

佐藤和典　巡査部長

「法務省かいけつサポート」

生活の中での、様々な困り事。金銭トラブル、近隣の騒音苦情、土地の境界、労働問題等、事件・事故ではないが解決出来ないということもあると思います。

警察でも相談や、相談ダイヤル等も設置していますが、事件・事故を除いた民事的なトラブル、相談は、弁護士等や第３者の仲介を得て解決に導くよう助言してます。　法務省が紹介している認証紛争解決サービス「かいけつサポート」があります。　様々な民事紛争に対しその解決の為の機関、団体を法務省が認証し、紹介する。

有料ですが法務省認証の機関・団体ですので安心だと思います。

昨今、個人の権利や利益が理解され、また享受されるようになった反面、他人との権利を巡るトラブルも増えています。万が一の時は相談してみるのも解決の方法だと思います。

本

送料無料

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実にお取り寄せします。
今読みたい話題作！欲しい本をお取り寄せ！
気軽にお問い合わせください。
通販は送料がかかりますが当販売所は無料です。
※当店取り置きとなります。宅配サービスは致しません。

道新九月号ポケットブックの御案内です。

▼ポケットブック９月号＝みんなの人気者
バナナ
おいしくて栄養豊富、１年を通して手頃な価格で購入できるなど。そのまま食べるだけではもったいない、皮に包まれたバナナの魅力を紹介します。バナナのおいしさの見分け方、保存方法、バナナが持つ効能や、バナナを使ったおやつや飲み物、食事メニューなどを紹介。。
配布済み

次号予告
「お酢の料理」　お楽しみに。

ねっとわーく屈足　検索

ねっとわーく屈足電子版
ミニコミ紙「ねっとわーく屈足」が、パソコンやスマートフォンで動画も閲覧できます。
ツイッターも屈足の話題一杯毎日更新！

じじーakira1942　検索

連続小説

完走

赤池武臣

「スタート五分前」
メガホンを持った中年の男が右手を高々と上げ大声で怒鳴った。
良太はその嗄れ声を聞いた途端、胸の奥がズキンと締めつけられ鼓動に拍車が掛かって腰の辺りが疼きだした。
疼きは全身に広がった。
「スタート１分前。全員、スタートラインについて」
男は再びメガホン越しに大声を上げた。
（いよいよだな）気持の高ぶってくるのが自分でも判った。
こぶしを握りしめて良太はスタートラインに着いた。
「よーい」男の声が響いた。
途端に良太は尿意をもよおした。
「どーん」・秋空にピストルの音が響き渡った。
どどっと地鳴りがし、横一徐に並んでいた選手がいっせいに飛び出した。
良太は先頭に飛び出した。何が何でも一等賞をとらなければという使命感が、心のブレーキを外してしまったのだ。確かに自分でも速すぎると思った。が、自分の意志とは裏腹に、足だけが先走る。足は軽い。
一キロ近く走ったところで後ろを振り返った。ちらっと見てもその先頭集団とは百メートル近く離れている。このままいけば、ひょっとすると、そんな思いがよぎった。
良太の心に余裕が出てきた。自分でも驚く程、呼吸が乱れていない。それにこのコースは三回、ひそかに試走もしている。余裕が自信に移行しはじめた。
黄金色の稲田もほとんど刈りとられ、細長い稲架掛けが初冬を待っている。村人たちはこの運動会が終れば競い合いながら稲の脱穀に励み、この年最後の秋祭りを待つ。
戦争で何もかも剥ぎとられてしまった人々の最後の心のよりどころはやはり秋祭りだ。
校庭から真っ直ぐ延びた一本道を左に曲がると水門が見えてくる。ここは良太の夏場の遊び場だ。
と言うより生活の一部といった方が適切かも知れない。
つづく